

有料支援サービス「スダチ」

パリパラリンピックの絶叫アナに始まり、兵庫県斎藤知事へのじれったい辞職勧告報道、大谷選手の驚異の 50・50 フィーバー、立憲民主党の党首選挙、そして刷新感がない結果となった自民党の総裁選挙などメディアの連日の過熱気味な報道で 9 月を終えるのかと思っていたら、非情な豪雨被害が能登を襲った。1 月の地震被害からまだ 8 ヶ月、震災を受けた住宅の解体工事進捗率が 10%と一向に復興が進まない中でのダブルパンチに能登住民の嘆きと失望は大きい。政府主導での急ピッチの復興を祈らずにられない。

そんな中で興味を引いた報道(記事)もあった。今世間で注目を浴びつつある不登校の家庭に有料支援サービスを提供している「スダチ」の代表小川涼太郎氏の「プレジデント」に掲載された記事が目に入った。彼は学校に行けない子に「無理して学校に行かなくてもいい」と言う主張に強い違和感を抱いている。「不登校支援の主流の『見守る・寄り添う』』というカウンセリング手法に不登校を長引かせている原因があり、大事なことは子ども自身が問題に向き合い、それをサポートすることではないか」と提唱している。再登校を目指したスダチでのメンタルフレンドを活用した「寄り添うカウンセリング」でどうもうまくいかなかったようだ。そこで彼は学校に行かないデメリットなどを考えさせ、学校へ行かない自由には責任を伴うことなど子どもに直接問題に向き合わせる指導へと転換した。不登校を長引かせているゲームやスマホへの依存に近い状態から、早く確実に抜け出せるべきとスマホ禁止の厳しい指導も取り入れている。さらに、フリースクールや通信制高校などをも柔らかに批判している。つまり、彼は一言でいえばスダチのメソッドを活用することこそ再登校への近道と考えており、その自信故に初回に 45,000 円の相談料はやむなしと考えているのだろう。

読んでいてもっともだなと感じた部分も確かに多い、多分再登校率も高いのだろう。だが、違和感は隠せない。そもそも「見守る・寄り添う」支援そのものに問題があるのではない。親は様々な相談室で「見守る・寄り添う」必要性の指導を受け理解するものの、実はわが子にどう接するべきなのか、つまり「『見守る・寄り添う』ってどうするの?」という疑問が残ったまま相談を終えているのである。

「見守る」とはわが子の現状をまず受け入れること、傷つき不安を抱えているわが子に共感することである。そして、「寄り添う」とは子どもの意見に同意し、次の行動を促しながらいっしょに行動することである。私は彼が今のカウンセリングの主流を批判しながらも、実際には親にはこの基本を大切にしながらカウンセリング支援を行っているものと思っている。

さて、10 月に入った。豊翔も後期の取り組みが新たに始まる。11 月の文化祭「豊翔フェス」も盛り上がりを見せ始めている。昨年度までの 6 年間の文化祭は、志塾フリースクールに相乗りさせてもらって大変お世話になった。今年は学院独自の単独開催を実現する。保護者や保護者 OG 会の方々にも積極的に動き始めていただいている。私は 2022 年 10 月のこのコラムで、文化祭でステージに立ち引き語りをして拓郎を歌ったら、次年度の 3 月に豊翔を引退すると書いた。想いは変わらないが、今年はまだ歌わない(笑)。

<注>コラムの過去掲載分は、NIWA 教育相談室の HP でご覧ください。

(丹羽 豊)